高知精神衛生

創刊号

内容
巻頭言 高知市 丸山
高知県厚生労働部生活衛生課 内田
高知県精神衛生協会 望月

発行人 谷 望
編集人 下司 孝麿
印刷所 谷内印刷工業KK

創刊の辞

谷 望

衛生という事は単に病気や不健康状態を予防し、適切な医療を行うという健康の防衛だけではなくて、積局的に健康を強化し、増進するのを目的としなければならない。精神衛生ではこの目的を達するためには在来の様に、各専門専門だけに偏した考え方を固執していたのでは到底その目的を達することができない。

その理由は、人間以外の動物ではその健康を論ずるにも、唯身体的な健康だけを考慮すれば足りるのであるが、人間は身体的な存在である上に精神的、社会的存在であるので、その全般に亘って検討した上でなければ真の人間の健康を論ずる事ができないからである。

そのため吾々には、人間の精神身体を健康に保ち、社会に対する適応性を高め、一方環境の浄化を図る等の人間に関する全部の知識を応用しなければならない。であるからこれを仮りに「人間学」と称することが出来るなれば、精神衛生とは要するに「人間学」である。

この難渋な問題に対して吾々は、執拗に取り組まなければ人間の終局の幸福は護られないと考えるので、ここに「高知精神衛生新聞」を刊行し、志を同じうする諸賢と共に学び、考え、且つ実行して真の人間の幸福へ一歩でも前進したいと念願する次第である。(精神衛生協会会長)

発刊を祝して

高知県知事 溝淵増巳

この度、高知県精神衛生協会から精神衛生新聞を発刊されましたことは、まことによろこびに堪えません。

精神病者の保護については、古くは明治三十三年の精神病者監護法及び大正八年制定の精神病院法がありましたが敗後の社会混乱と、国民生活の不安定は必然的に生活環境の悪さを招き社会病とも云うべき精神障害者を増加せしめ、しかもこの数は社会の進歩複雑化と共に年を逐って増加し憂慮すべき状態となりました。これがため、昭和二十五年五月に精神衛生法が制定され、精神障害者等の医療及び保護を行い、且つその発生の予防に努めることによって、国民の精神的健康の保持及び向上を図っております。

本県の場合厚生省の調査によれば昭和三十一年末における精神障害者の推定患者数は約一万三千人に達しており、その内相当数は治療入院を要するものと見られています。

こうした精神障害者の発生の予防には如何なる生活環境が必要であるか、文明病と云われる神経症(ノイローゼ)はどんなものであるか、等々精神衛生行政上からも重大な問題となっておりますが、この新聞が発刊されたということは、まことに県民にとってもよいことであり、精神衛生行政上からも音及につとめておりますが、これが発刊を祝して大きな期待を寄せる次第であります。

ノイローゼについて

倉光正之

文化の変動

神経症という言葉は、一頃、ノイローゼという流行語でジャーナリズムにとり上げられた。近頃は大分下火になって来たようだ。だが、神経症そのものがへった訳ではない。ジャーナリズムというマスコミの波に乗らなくなっただけだ。社会或は文化が激しい変動を続けている時代、云いかえれば、人間が生活してゆくあらゆる場面に、たえず緊張を伴う時代においては、神経症がふえるのは当然であろう。こういう時代に生きる人々は、程度の差こそあれ、神経症的な傾向にあるとも云える。

神経症形成のメカニズム

一つの症患としての神経症状態に、誰でもなるかといえばそうでもない。人柄の上に、ある特徴を有する人に、思うようにならない状態(慾求不満)或は精神的な葛藤などが続くと、漠然とした情動的な不安を生じる。そうすると、自分自身の云う注意が向いて来て、生理的範囲内にある身体上の変化や精神的能力などに不安を感じるようになる。即ち、心気的な心構えを持つようになる。これにいろいろの精神的な加工が加わって、種々なタイプの神経症が出来上る。

これは先日開かれた四国精神病院協議会における愚痴桜井教授の講演のうけ売りであるがこの春に行った神経症巡廻診療の経験によっても、心気的な心構えというものを多かれ少かれ伴っている症例が甚だ多かったようである。

神経症と身体病との混合

ある身体的な異常状態を、これは神経症だ、これは神経症ではない、と簡単に割切ってしまう訳にはゆかない場合が屢々ある。即ち、何割かが諸貫的障害による症状で、あとの何割かが神経症症状であるといった場合である。こういうときに、われわれは神経症の重量とか加重とか呼んでいる。

医者の責任

神経症的な人柄の人々を診察する場合には、余程慎心しておかないと、いつのまにか患者に不安、心気的心構えをもたせ、結局、神経症を形成させるはめになるかもしれない。

神経症の治療とは

臨床家としての私の立場から要点だけにふれておこう。誰でも経験があるだろうが、心配ごとや腹にすえかねる場合、然るべき人に心底を打明けると、胸が豁然と開けてくるものである。(馮下作用)と呼んでいる。だからまず、患者の訴えを、うるさがらないで辛抱強く聞いてやることが必要である。第二に、当人の神経症成立の過程を正当に把握した上で、わかり易い言葉を使って、現在の状態を理解させようと努力するのである。

現実に適応した心構え

こういう措置を取った上で、現実をありのままにみつめ、現実に適応した心構えを持つように指導する。さらに、不規則で乱れてしまっている日常生活を徐々に規則正しい積極的な生活態度に戻るように忍耐強く指導するのである。

薬物使用の意味

神経症患者は、現在において現実の悩みを持っているのだから、そのままでは心理療法や生活指導を仲々スムースには受付けない。それで一応、一時的に

不安・神経症に……
精神神経安静剤
(包装) 12錠 30錠 100錠 500錠 1000錠
武田薬品工業株式会社

協会役員紹介
会長 谷 望 副会長 領藤五一郎 土佐病院長
下司孝麿 精華園長
監事 今村寿生 谷病院事務長
常任委員 田村敏村 県医務課長
委員 森本緑郎 精華園園長
田辺善丸 田辺病院長
倉光正之 高知精神科長
宮田金雄 宮田病院長
顧問 町田昌直 町田病院長
見元弘尚 県医師会長
中内力 県厚生部部長
田中和四郎 〃 〃
〃 〃 〃
〃 〃 〃

ある保健婦の手記

松田満喜子

前途有為と将来を望まれていた一人の青年が急激な生活環境の変化によって精神病院を転々となり、ついに精神状態が異常となりなければならないと云う一つのケースにつきあたり、私は私なりの感想をもっております。

彼は第二次大戦も終末に近い頃、高等小学校を優秀な成績で卒業し漁業の大きなその当時の国策会社に就職して渡満しました。終戦を迎えて外地に在った人々が一様になめた悲惨な道を辿って若い身空に苦労を重ねてやっとの思いで帰国しました。今迄は親の手許で何不自由なく育って来た人間が急に一人で満洲へ、そして、それ以上の変化である終戦時の混乱にたち向うには余りにも、精神的な負担が重過ぎたのでしょうか、なつかしい父母の許へ帰ってから間もなく彼はあら過事を口走り、所々は発作的に狂暴な振舞をするようになったのです。

驚いた肉親が早速専門医の診断を求めて、家庭に置く事が出来ないとの結果で、高知市のT病院に入院させましたが、数ケ月には彼は全快の喜びには程遠い情ない状態で帰ってまいりました。何故このような状態で帰郷せねばならなかったでしょうか。その原因は勿論、経済的な負担に保護者が耐える事が出来なかったからです。家庭的には父親が戦中公務にあって、文官恩給の受給者であり、また兄も公務員として勤務している為に生活扶助の面が閉されていた為であったそうです。精神衛生法による費用の負担をしてもらえないので、家に神れば困る事が分っていながら、引取ってしまいました。結局病人を入院させなくてはと云うが、そうかと云って入院させれば費用の面でなおさら困ると云う結果になってしまったのです。

それからと云うものは家族は部落の人々に肩身の狭い思いをしながら過してまいりましたが昨年末に再度発作が起り止むを得ず費用の点は後廻しとして入院させました。(余りにも狂暴な行為が、連続放火等)そして入院後も何度か、費用の面での問合せがありましたが、確たる返事も出来ず、保健所の方も精神鑑定の結果が出る迄は分らない状態で、その間家庭は精神的に相当の猛手を受けたようでありますが、幸いと云うか、不幸と云うか、彼は措置入院患者として鑑定された旨の通知があり経済的な面では家庭の暗さは多少軽減されたようであります。このままの状態で一日も早く彼が元気な姿をなつかしい故郷に見せて呉れるのを待ちかねているような訳であります。

これは極く簡単な事例でありますが、私達の職場の彼方、此方にもこれと似たようなケースが少くないようです。つまり病気で困ってはいるが、それに伴う費用の面で入院させたくても出来ない人々が多数おります。全部の人々に措置入院の道が開かれるのを希望していますが、現在の処それは不可能と云えましょう。ひっそりとした座敷牢で何年も過している人生の悲劇事もこの仕事に多少なりとも関係のある私達の忘れてはならない事の一つではなかろうかと思います。(土佐清水保健所勤務)

風船玉

田中和四郎

青少年の非行は最近特に目を捉うものがある。量の増加ばかりでなく、次第に悪質化してくる傾向にあり、殺人、暴行といった極悪犯行が平気で行われるなど困ったことだ。

こうした青少年の非行については、そのよって来るところ、極めて複雑多岐であるが、近頃こんなことを考えるのである。

さて一つの簡単な物理学の実験をお目にかけなければならないが、ここに広口の瓶がある。その瓶の中に、ゴム風船の手頃な大きさのを一つ入れて、そして瓶の口を平ゴムでしっかり蓋をする。そこで実験に移る段取りとなるが、その口のゴムを掌でいろいろ揉んでおしつけたり、はなしたりして見る。そうすると、中の風船玉は小さくなったり大きくなったりするのが見られる。

次に口ゴムに小さい穴をあけて細いクダを挿し込み、瓶の中の空気を吸い出してみる。中の風船は段々と大きくなってくる。これは真空実験でもよくやることだが、瓶の中の気圧が下がる時には風船の中の気圧も低下する。こんなことは中学生でも知っていることである。

これがさて子供の非行とどんな関連をもつのかということになるが現在の非行青少年は正に稀薄な気圧を内にもつこの風船玉に相当しないだろうかと思うのである。彼等には社会的行動空間の禁止領域が極度に狭くなっていて、ほとんど、最低の限界にまで来ている。民主主義―自由、闊放、人権、自主等々の美しい辞句に迷って彼等の生活圏の気圧は次第に降下してしまっている。だから悪質の暗黒、無秩序な気圧の雰囲気によって爆発する危険もあり、ことは全く同じ事理に帰するのである。神経症するのも結むのも正常な状態でなるのも戦時中のアツツ島上陸頃の日本のように正に神経切っている程おしつけることも、高い気圧を戻し、正しい行為の規範となるものがほしい気がしてならないのだ。圧力が強過ぎて小さくなる程おしつけることも、高い気(高知大学教育学部心理学教授)

投稿

精神衛生予算は増えないのか

浜田末治

精神衛生法第二十九条該当者に決定された患者のうち同法の措置患者(二十九条適用患者)として入院治療出来る精神病患者はどの位あるだろうか。

折角入院は出来たが「精神衛生法による予算がないから」と生活保護法に廻され毎月の自己負担額は高むばかり、従って一家の生計と患者の医療費の板挟みにあい仕方なく退院される患者も決して少くはない筈だ。

右の事については主務官庁は良く承知していながら毎年「予算がないから」の一点張……言わすれば県予算の防波堤とはなり得ても精神衛生法の使命には程遠きの感をまぬがれ得ない。

連絡を受けた町村役場の係はあわてて本人の家庭に馳せつけ診察・保護並に生活保護法による医療扶助手続(予算がないというに決っているから現在ではこれが普通)を其の日のうちに完了し不安の面みる影もなき家族と共にいらいらしながら待てど暮せど診察せよとの通知がなく見える人々ですら「此の人さえ来なかったら……」と考えた事は一度や二度ではない筈である。

これ等の事を思うにつけ、町村役場で実際に問題と取組んでいる吾々の切なる希望は県社行政を一歩進めるためにも精神衛生担当係の予算を増額してもらいたいということである。(吾北村厚生衛生主任)

書評

「学生、生徒指導のためのカウンセリング―その理論と技術」という、そと見にも、ずいぶんすっきりした、しかも内容において従来のそれとは感覚的に異った書物が、近頃高知大学鎌島友亀君によってものされたことは、同僚として嬉しさにたえません。

大部の内容は第一論が学生、生徒指導の理念とカウンセリングで、これをカウンセリングの意義、世界における現代及びわが国の場合といった三つの章にまとめ、また第二編を「カウンセリングの理論と技術」として、カウンセリングの理論、その実際の技術、カウンセラーの問題の三章におさめています。それに附録として各種事例についての記録など盛られています。

申す迄もなくカウンセリングの仕事は、あくまで現場に密着ついた仕事として、実際指導の効果が何かの形で確く記されます。そこで実際問題に直面する巧拙が大きな問題はなって来ます。といって只手先の技巧に溺っていては之またこの仕事はもものになりません。こうした意味からこの両者を適切に結び交ぜた記述によってなっているのがこの書物です。その一つの例として附録に記録されている数多くの事例とそれに関連している事的に論旨を進めるとしかるなどなかなか気がきいています。しかもこれが体系的に高い観点に立って全体を見通しつつ主旨が展開されているので理解が噛み砕かれているなど共に的初春の人々でも、巧妙に説明されて読める筈です。今後精神衛生に関する指導の書として期待する次第です。(田中生)

同学社発行 A5 版 (昭和31年12月) ¥ 三五〇